

わんぱ

秋号



民話を楽しもう



ほら穴様

文・結城市教育委員会
挿絵・佐々木明

林の西の方に、大きなほら穴がありました。あたりには、草がぼうぼうと生えた淋しいところでした。だれも近寄る人はありませんでした。

でもお葬式そうじきや結婚式などのように、人寄せことができる、村の男たちは、ほら穴の前にやってくるのでした。そして、真っ暗いほら穴の口をのぞくようにして、

「あしたは、村に人寄せことがある。ぜんや、わんを三十人分かしてくれ。」

というのです。中はしんとしすまりかえっていて、物音ひとつしません。人のいるような気配は全くありません。

このほら穴へくる使いは男たちにきまっていました。

女達には、気味悪くてとても近寄れなかったのでした。

その男たちも、たのみことが終わると、こわくわく穴の前を離れ、あとは絶対にふり向かず、一目散に帰ってくるのでした。

翌朝、村の男たちが、ほら穴へ出かけて行く時、ほら穴の前には、頼んだとおりの膳、わんがきちんと積んでありました。



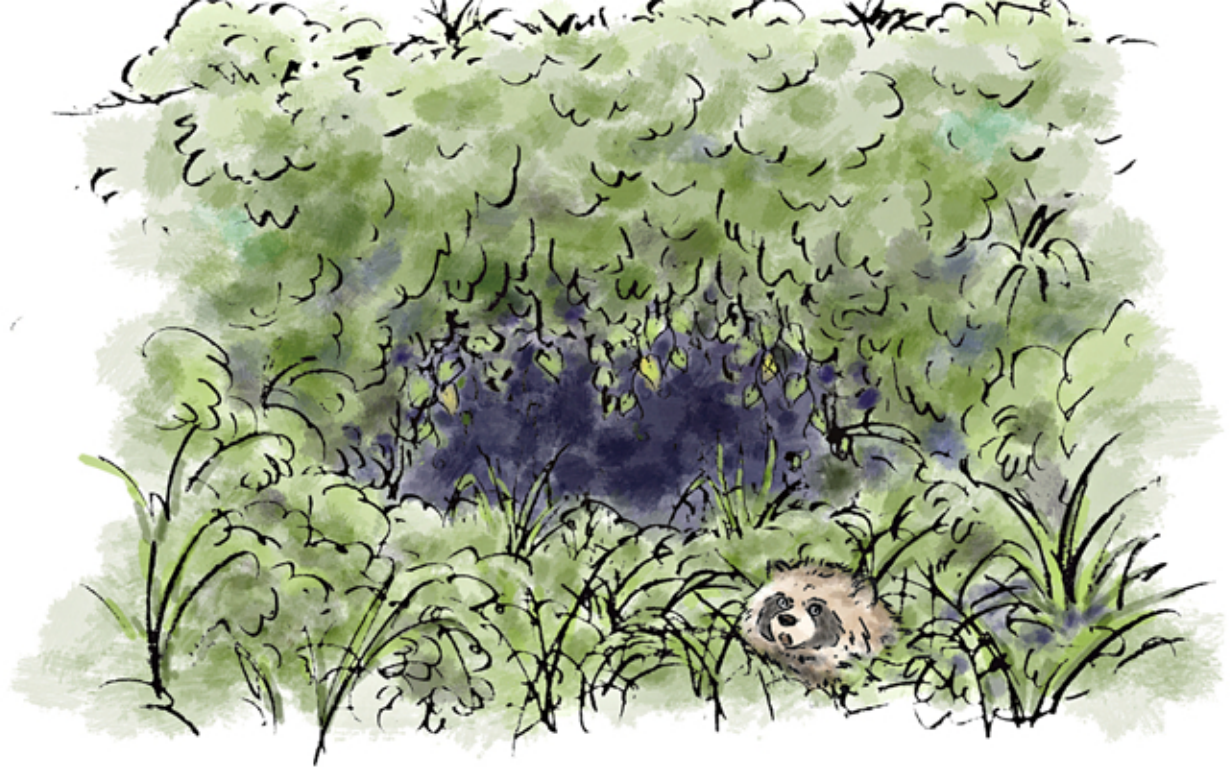
金の家紋のついた黒ぬりの立派な膳わんです。

こうして、村では何かあると、ほら穴様にたのんでは膳わんをかりてちょうほうしていましたが、だんだん返し方がすぼらになり、よくきよめないまま返したり、借りただけの数を返さなかったりするようになりました。

そして、ほら穴様は、いくら頼んでも、もう膳もわんも貸してはくれなくなったということです。

どんな人が住んでいたのでしょうか。

だれも見だたことがありません。



どことなくらしをして
いたのでしょうか。
だれも知ることができ
ませんでした。

いつ頃どこから来たの
でしょうか。

どこかへ行ってしまっ
たのでしょうか。

だれも知ることができ
ないまま、穴の入口は、
ぼうぼうと草に覆われ、
村の男たちが、ふみつ
けて作った細い道も丈
の高い草でかくされて
しまいました。

おしまい